
ほのぼの？デュエル日記

旧式ザク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの?デュエル日記

【Zマーク】

Z2694Z

【作者名】

旧式ザク

【あらすじ】

口下手でデュエルの腕も余り強くない根暗少年（自称）がGXの世界にやってきた！？というかやって来ちゃいました！？

なんか知らんが勘違いされまくつて悪役に！？

しかもいつのまにか原作に巻き込まれてるし（敵側として）もうなにがなんだかわかんねえ！！

「、二つの新しい試験ですか。（前書き）

「でも、旧式ザクです。

始めてなので「あいたー」というがあつたり、「更新まだあー？」とか言われる事態もあつたりするかも知れませんが、それでもよければ、どうかよろしくお願ひします。

「、このままやら試験です。

皆さん、異世界トリックって言葉を知ってるだらうか？

まあ、このサイトを覗いてる時点で説明不要だらうが、簡単に言うと、

1、ワーイ！でっかい魔法陣だー！

2、およ、怪しく光り始めたぞー！

3、わあー、吸い込まれたー！

4、気が付いたら魔王の城の真ん前だー！

5、うわあ！中から魔人らしき人達が表れたぞー！

6、戦おうにも初期レベルじゃ歯が立たねー！

7、うわあー！

GAME OVER

みたいな感じである。

ん、途中おかしくなかつたかつて？

いいのいいの、大体合つてる筈だから。

どんな物語もあんな始まり方でしょ？

んで、なんでそんな話をしたのかと言ひとく。

『受験番号7番、前へ！』

…………まあ、やつこいつ事である

○○○○○○○○○○

私、水城力ナメは、ただ今ドーム状のお部屋のど真ん中におります。

なんだからって？そりゃこいつが「トヨヘルアカデミア」の試験会場で、俺は今受験生だからでしょ？

もつとも、こんな受験形式始めてだけじゃー（ズン）

一応筆記テストもあるらしいけど、そもそも俺、今日この世界に来たばつかだし。

どうやって来たのかだって？そんなの知らんー俺はお授業中にお椅子でブランコしてただけだよ。そしたらこいつのまにかこに来てたつていう、そんだけだよー！

うん、わかると思うけどメチャ混乱してんだよーだから理由がわかる奴、早くでてきて俺を元の世界に帰してくれよおおおー（泣）

。俺あんま強くねえよおおお～。

「受験生、準備はいいかい？」

ハツ！！

いかんいかん、ついま yw or 1d にはまりじんでいたよつだ。
氣を引きしめなくては！

「…………大丈夫だ。すぐに始めよう」

少しぶつきらぼうだつたけど、まあいいか。そう思い、俺は『テ
エルディスクを広げる。って、身体が勝手につづいた！？』『テ
ュエル！…』『

「先攻はもうひとつ、ドローー。」

…………掛け声も、勝手に口から出てしまつた…………。

まあいいや、とつあえず今は『トュエルだ。

相手は試験官を名乗つてる位だ。そこそこ強いのだらつ、きっと。

さて、一体どんな『テッキ』なのやら

「僕は手札から、『永続魔法』『未来融合フューチャーフュージョン』
を発動！」

げ、嫌なカード来たよ。

指定されたカードを墓地に送るだけで、2ターン後ではあるが強力なモンスターが呼べる融合系サポートカード。

「ハーフ・モンスターまだそうでも無いらしいが、現実では墓地を稼ぐ事は『デコホールの基本であると同時に、勝敗を分ける要因とも言える。

例えばドラグニティー。あれは墓地が墓地じゃなくて、むしろフイールドの一部となつていて、まったく嫌な奴らだよ。

例えばHERO。墓地融合に除外融合、そして手札融合の操作一つで極悪非道なモンスター共が並んでしまう。誰だ所詮速攻つて言った奴！トライに連れ込んでフルボッコにしてやるぞ！主に説教で。

例えばシンクロン。そもそもあれは墓地が無いと始まらないが、墓地さえ溜まれば『使いにダイナマイト、ガンダムもどきに、果ては自重竜星屑まで出てきやがる。

…………とまあこのように、墓地に送るだけでアドバンテージが取れるカードなど沢山ある。他に例をあげるなら……。

「僕は『仮面竜』三体に、『タイラント・ドラゴン』一體を墓地に送り『F・G・D』を選択！」

「うそ、あとレダメによるドラゴンベアードも……。
……って、え？」

あれ、この展開どつかで見たような。

初ターンで最強モンスターとかいくらなんでも無茶苦茶でしょおおーーー！

そう呆然としている間に、神々しい姿をした五首の龍がフイールドに現れた。

出たけでもの凄い風圧なんだけどおおお！？

回りからは「あいつ終わつたな」とか「あの先生え容赦ねえ」とかいわれてるし。

「先攻では攻撃できない。ターンエンドだ」

A vertical column of eight small circles, arranged in a single column from top to bottom.

(やれやれ、面倒な役を買つたもんだよ。)

僕は溜息をついてそう思つた。

今日は僕等が教師を勤めているデュエルアカデミアの高校入試だ。と言つても、筆記試験自体は既に終わつてゐるわけだし、残つてるのは実技試験、つまりはデュエルのみだ。

つと言つても、そこは試験だ。いくらトコエルの腕に覚えがある

とはいえたまだ発展途上の学生達に負ける程、こここの教師達のレベルは低くない。そのため、自然と手を抜くこととなる。まあたまには、本気を出しても負かされてしまつ時もあるのだが。

（テューリストとしては、あんまり手抜くとかしたくないんだけどな～……）

そつは思つが、今回の目的は悪魔でレベルの確認だ。本気を出して全員負かしてしまつては、試験の意味がない。（わかつてはいるんだけど…………やっぱり、ねえ）

やはり不満なものは不満である。

自分が手を抜く事もそつだが、さらに不満なのはいくらなんでもわかりやす過ぎるプレイをする同僚達だ。

一ターン田から伏せカード無しで高レベルモンスターを置いとくとか、自殺行為だ。次のターン除去なんかされたらどうするんだ。

…………いかんいかん、テストだと言つのに大人気ない思考だつたな。

さて、気を取り直していきますか。

そう思つて、壇上に上がつて来た次の受験者の姿を見る。

黒髪のショートに同色の瞳。

だが田つきは鋭く、じかに全てを見透かさんとする眼光を持っている。

さらに姿も異様だ。

身長や体格はそこまで特筆する事も無く普通なのだが、首に掛けた黒いマントがその存在を大きくする。

マントも、よく見れば所々が破れており、歴戦の強者たる雰囲気を漂わせる。

(ふうん、中々の雰囲気だね。今度は期待できそうかな。)

前の受験生は初ターンでタイラント・ラ・ゴン二体並べただけで既に諦めていた。

さて、今回はどうかな。

「受験生、準備はいいかい？」

「…………大丈夫だ。すぐに始めよう

先生に対して敬語もなしか…………。

ま、デュリストに敬語がいらないってのは僕も同感だナゾ。

じゃあ始めるか。余り期待を裏切るなよ、少年！

『『デュトル！』』

「先攻は僕が貰つよ。ドロー！」

…………「れはこれは。

「僕は『未来融合フューチャーフュージョン』を発動！僕はデッキから、『仮面竜』三体と『タイラントドラゴン』一体を墓地に送り、『F・G・D』を選択！」

悪いけど受験生、初ターンから詰ませて貰つよー！

「やうに手札から、『龍の鏡』を発動！先程送ったドラゴン達を除外し、F・G・Dを特殊召喚する！」

まあ降鱗せよ、ドラゴン族最強モンスターーーー！

天空に白き大穴が空き、そこから神々しい姿をした五つ首のドラゴンが姿を現す。

その瞬間、会場内にもの凄い風圧が起きる。

つてやつべ、やつすぎた。

流石に初ターンでこれは無いかなー。

とか思つて受験生の方を見た瞬間、

(ハーー)

身体全体に、寒気が走った。

(笑つてゐる……………？)

楽しそうではない。

いや、楽しそうではあるのだが、よくテュリストがする『強者と出会った時に浮かべる』笑みではない。

まるであれは、補食者の笑み。

全てを『』のものとする、邪悪な笑み。

(な、なんだこいつ……)

ただ笑つただけだと嘗つのに、この威圧感。

「…………何が可笑しいんだい？」

「…………いや、何でもない」

そう言つて、彼はテッキに手を伸ばす。

「…………俺のターン」

一体何をしてくるつもつなんだ、こいつはー

「…………俺は手札の『悪魔邪苦止』を捨て、『鬼ガエル』を特殊召喚する

フィールドに黄色いガマガエルみたいなモンスターが現れる。

「なんだそのちんけなモンスターはー！」

「やる気あんのかああああー！？」

他の受験生達が野次を飛ばしたりしているが、今は耳に入れない余裕がない。内心、冷汗だらけだ。

「…………このモンスターが召喚、特殊召喚、反転召喚に成功した時、デッキからレベル2以下の水属性・水族のモンスターを墓地へ送る事ができる。俺は…………『悪魂邪苦止』を選択」

「…………さらに俺は、『鬼ガエル』を生贊にし、『デスガエル』を召喚」

黄色いガマガエルに代わり、今度緑色の、至つて普通の蛙が現れる。

「…………デスガエルのモンスター効果、墓地にいる『悪魂邪苦止』の数だけ、手札、またはデッキから『デスガエル』を特殊召喚できる」

さらに二体、緑色の蛙が現れる。

「一気に三体並べたのは凄いけど、それじゃあ『F・G・D』を倒せないよ?」

僕は焦る気持ちを隠しつつ、わざとらしく言つたが、相手は意にも介さない様子で、自分のターンを進める。

「…………俺は手札から、魔法カード『死の合唱』発動」

彼がそう言つた瞬間、緑色の蛙達がゲゴゲゴと鳴き始めた。

……心なしか、レクイエムのよつこも聞こえる。

「『死の合唱』は場に三体の『デスガエル』がいる場合のみ発動可能。相手フィールド場のカードを全て破壊する

「なつ……」

慌てて『F・G・D』を見ると、時既に遅し。調度『F・G・D』が倒れ込み、破裂したところだった。

「…………」それで終わりだ

僕が呆然としている間に、三体の蛙が向かってきた。

「、このおめでた試験ですか。（後書き）

ひょっと……ないですかね？

ほのぼの？ テュエル日記

○○○○○○○○○○

あつはつはつはつはははははダメだ俺あもう終わりだ。
いきなりあんな最強モンスター出されたらもう俺はオシマイダア。

大体何だよ攻撃力5000つて！！

L.P 8000制ならともかく40000だつたらワンキル可能なレベルじゃないか！！

何考えてんだよ試験官！受験生殺す氣が、プレッシャーで！
そんな事を考えていると、試験官が話しかけてきた。

「……………何が可笑しいんだい？」

……來たんだけど、なんか凄く険しい顔してらっしゃいますよ、
試験官。

いや、別に貴方のF・G・Dを笑ったんじゃないんですよ。
いきなりこんな訳のわからない世界に飛ばされて、自分のデッキ把握仕切れないままデュエルさせられて、始めてのソリッドビジョンでビックリする間もなく最強モンスター出されたら、素人の俺としてはもう笑うしかない訳ですよ。

ん？本当に素人のかつて？

そーだよー本当に素人だよー。デュエル始めたのもほんの数ヶ月前に勧められだし勝率はかなり低いよー。

え?さつきの知識はなんだって?

全部友達からの受け売りだったり、実際にデュエル見て感じたものばっかしだよー。カードの種類とかまるで知らんし。いつも使ってるデッキだって、友達から貰った余りカードだったり、ケチツて安い店探して買った安物だらけだしねー。

そんな俺があんなレアモノ見せつけられたらもう降参するか、笑つて見てるしかないわけなんですよ。

なんて事情相手は知らないだろ?し、知つても「だから?」って言われちまうんだろうなー。

「…………いや、何でもない」

俺は半ば諦めモードでとりあえずターンを進める事にした。

友達曰く「どんな時でも様々な可能性がカードにはある」だつて。

つたく、そんなんでなんとかなつたら誰も苦労はしねーよ。

「…………俺のターン」

さて、手札はつと、

デスガエル × 1

鬼ガエル × 2

悪魂邪苦止 × 1

死の合唱 × 1

ええー何このチート手札。素人ですらわかるようなチートっぷりだよ。

ちなみにドローカードは貪欲な壺だったけど、これは使う事も無いだろう。

「…………俺は手札の『悪魂邪苦止』を捨て、『鬼ガエル』を特殊召喚する」

俺のフィールドに黄色いガマガエルみたいなモンスターが現れる。

つてかなにあの姿ーめっちゃプリティなんですーー！ キヤーーー！

あの柔らかそうな肌に潤んだあの瞳。ビコトなく儂げだけど、それがまたかわいさを引き立てて、お兄さん、ニヤケ顔が止まらなあいーーなんて恐ろしい技術なの、ソリッドビジョンーー！

「なんだそのチンケなモンスターはーー！」

「やる気あんのかああああー！」

なーんて事を思つてると、外の野次馬（受験生）共が煩く罵倒しきやがつた。

つてあんだと？誰だチンケなモンスターだつて言つた奴。
…………そこか。

『マスター落ち着いてー！こでキレたら、マスターの質が落ちてしまますー今は『デュエルで勝ちましょー！』』

…………そだねー。キレちゃいけないとねー。
…………ああ言つてる事だし、ちゃんと『デュエルしないとねー。』

「…………」のモンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからレベル2以下の水属性水族のモンスター一体を墓地に送る事が出来る。俺は…………悪魂邪苦止を墓地へ送る

さて、これで種は揃つた。

やれやれ、いつもこれくらい揃つてくれると嬉しいんだけどねー。

「…………俺は『鬼ガエル』を生贊にし、『デスガエル』を召喚する」

黄色い蛙に打つて変わり、今度は緑色の蛙が現れる。

「これもこれで可愛いんだけど…………、んーなんか違う気がする。」
「…………『デスガエル』のモンスター効果、墓地に存在する『悪魂邪苦止』の数だけ、デッキ、手札から『デスガエル』を特殊召喚出来る。」

さらに一体の蛙が俺のフィールドに揃う。

「一気に場に三体のモンスターを並べたのは凄いけど、それじゃあ『F・G・D』を倒せないよ」

先程まで強張った試験官の顔が少し緩み笑みを浮かべている。

つて、え? マジつか、マジで言ってんの?

この三体が並んだ時に打てる魔法カードって結構有名ですか？

「…………俺は手札から、魔法カード『死の合唱』発動」俺が

ゲ「ゲ」ゲ——「ゲ——」、ゲ「ゲ」ゲ「ゲ」ゲ——「——」。

なぜだろ？ 可愛い蛙達が歌つてるとこりに不吉な音
樂にしか聞こえないのは。

つて、あれ？

あのドリフン大分船泳いでない？

そろそろ倒れそうだけど、先生それに気づいてるのかな？

…………一応教えとことあげよつと。

「『死の命體』は自分の場に三体の『トスガホル』が存在する時発動可能。…………相手ファイールド上のカードを全て…………破壊する」

「なつ……！」

と、言つたのと同時に、あの巨体が前のめりに倒れこんだ。

つて、スッゲエ迫力何ですけど……ガチで風圧起きてるし、本当にこれソリッシュビジョン！？

先生もなんか呆然とじちゃつてて。ちゃんと警告して上げたってのに。

…………田、覚ましてやりますか。

「…………これで…………終わりだ

さあ娃ちやん達、田を覚まして上げちやつて……

俺が手を翳すと、緑色の蛙達が一斉に先生の元へと飛んでいった。

「うふふ、うふふ、俺、誰と話してたんだらつ

L P 4 0 0 0 0

○○○○○○○○○

とある場所のとある部屋。

その部屋はどういうわけか薄暗く、そこに存在する人物は皆一様に一体の影にしかみえない。

唯一の光は、この部屋に取り付けられたモニターの光のみ。

「ほう、この坊主中々やうおるな

一つの影がモニターの映像を見ながらそう呟いた。

姿は見えないが、その声はかなりの年を経た年寄りのものだとわかる。

(まさか儂の放った刺客を倒しつぶるとわな)

モニターには一人が膝をつき、もう一人が颯爽と立ち去る姿が映っていた。

本来、今膝をついている者は学校の教師では無い。

いや、教師ではあるのだが、本来の職業は教職などではなく、老人の元で働く、所詮諜報員といつやつだ。

今膝をついている者は一年前からデュエルアカデミアに教師として送り込んだのだ。

別にこいつじゃなくてもよかつた。現に、デュエルアカデミアにいる諜報員はこいつだけじゃないし、この姿からは想像出来ないだろうが、実はこの老人の主戦力の一人だつたりする。

のだが

(あ奴はどうにも我が儘過ぎて、使い勝手が悪い)

何と言つか、我が強過ぎるのだ。

強いのは、まあいい。しかしその自信のせいで傲慢さが田立ち、勝手に一人で突っ走つてしまふ一面もあるのだ。

だからデュエルアカデミアに潜入任務という名目で、奴を教職に就かせたのだ。 強さだけではない。強さ以外にも大切な事がある。それを学ばせるために

まあ今はそんな事は置いておいて、今はこのモニターに映つてる少年の事だ。

欠陥品とは言え老人の主戦力の一人を倒したのだ。中々の実力を持つてると言えよう。

「いつかこの少年と話してみたいものだのう」

暗闇の中で怪しい笑みを浮かべながら、老人はそんなことを言つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2694n/>

ほのぼの？デュエル日記

2010年10月9日12時34分発行